

「追究する力」の育成に向けた 小学校音楽科における 児童の主体的・対話的で深い学びの充実

指導主事 彌永 有香

研究協力員 菊陽町立菊陽中部小学校 教諭 合志 るみ子

1 研究主題について

研究協力員の所属する菊陽町立菊陽中部小学校の教育目標は、「自ら学び、心豊かに、たくましく生きる子どもの育成」である。また、目指す児童像には、「よく考え意欲的に学ぶ子ども」が掲げられている。

児童が「意欲的」に学ぶためには、まず、「考えたい！やってみたい！」と思える様な課題に出会わせることが大切である。また、児童が「よく考える」ようになるためには、目的意識・相手意識のある課題設定により、常に課題意識を持ち、課題の解決に向かって見通しを持って粘り強く取組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びを実現することが必要であると考え。

次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめの総論部分には、子どもたちは、学校も含めた社会の中で、様々な人と関わりながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできることなどの実感を持つことができ、と述べられている。さらにそうした実感は、子供たちにとって自分の活動が身近な地域や社会生活に影響を与えるという認識につながり、これを積み重ねていくことにより、主体的に学びに向かい、学んだことを人生や社会づくりに生かしていこうという意識や積極性につながっていく。

また、芸術ワーキンググループにおける審議のまとめの中には、音楽科の現行学習指導要領の課題として、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと」「生活や社会における音や音楽の働きについての関心や理解を深めていくこと」等が挙げられている。生活の中に音や音楽は欠かせないものであるが、音楽の授業ではなかなか学校生活とリンクできず、子ども達にとっての生活と音楽とのかかわりが薄いと思われる。

このような課題を踏まえ、生活と音楽とのかかわ

りに関心を持ち、自らの活動により学校生活をよりよくできるといった実感を持つことができるような音楽の授業を通して、自ら課題を発見し追究していく力を獲得していくことは、「これからの社会に求められる資質・能力」を育成することにもつながり、学校目標の「よく考え意欲的に学ぶ子ども」の実現にもつながる。

これらのことから本研究における「これからの社会に求められる資質・能力」を「追究する力」と設定した。さらに児童の「追究する力」を、目的意識・相手意識のある課題設定をすることで「課題に向かい、自分の思いや考えをもち、よりよく解決しようと意欲的に取り組む姿」と捉え、検証を図ることとした。

2 授業構想について

表1は本題材「音楽でメッセージを伝えよう～そうじの終わりを伝える音楽をつくろう～」の授業設計を示したものである。

第一次では、学校生活において改善したい問題を共有し、音楽の力で解決できそうなことはないかを考え、「音楽でメッセージを伝える」という課題を把握する。そして、本題材の学習を通して出来上がった音楽は、「6の1からの提案」として全校に投げかけ、実際の学校生活の場面で流すことをゴールに見据えた。児童から出された意見と教師の思いの重なる部分から、「そうじの終わりを伝える音楽をつくろう」という具体的な課題を設定した。このような目的意識・相手意識のある課題設定により、主体的に学習できるようにした。

第二次には鑑賞活動を組み込み、音楽を形づくっている要素が変化することにより、どのような効果をもたらすかを学ぶ。この学習で学んだ事を、自分たちがつくろうとしている音楽がそうじの終わりを伝える音楽になっているか、どうすればそうじの終わりを伝えることができるのか、といった課題を解決するために生かすことができるようにした。

第三次の音楽づくりでは、学習してきたことを基に、モチーフ（元になる旋律）をどのように変化させればメッセージが伝わるかを個人で考え、グループ活動や全体の場で練り上げていく。

表1 本題材の授業設計

次	時	学習活動	研究の視点との関連
一	1	菊陽中部小学校の学校生活において改善したい問題について考える。	【学びを引き出す】 ●身近な問題から学習課題として設定することで、目的意識・相手意識を明確にする。 ●学びを引き出す「問い」の工夫
	2	音楽で提案できることを考える。 ○モチーフとなる旋律を知る。	
二	3	「山の魔王の宮殿にて」を鑑賞する。 ○音楽を形づくっている要素が変化することを聴き取り、感じ取ったことを伝え合う。	【学びを引き出す】 ●音楽の要素とそれらが生み出すよさや面白さを感じ取り、音楽づくりの活動につなげる。 【学びを支える】 ●パネルを提示し楽曲を可視化する。
三	4	「そうじの終わりを伝える音楽」をつくる。	【学びを振り返る】 ●モチーフの主旋律を繰り返す中で、強弱や速さ等を変化させることで前時の演奏と比較し、変容に気付くことができるようにする。 ●学習内容を振り返るだけでなく、課題に迫ることができたかについて振り返り、「追究する力」を意識できるようにする。 【学びを引き出す】 ●音楽を形づくっている要素の効果や働きを使ってメッセージを伝えられているか考える。
	5	○メッセージを伝える方法（変化をつける等）を考える。	
	6	○3つのパターンの演奏を聴き比べ、さらに伝わりやすくなるよう音楽を形づくっている要素を変化させたり付け加えたりする。 ○演奏を録音し、クラスの提案として発表する。 (音楽→集会活動)	

3 研究の視点

音楽科の目標の中に「音楽を愛好する心情を育てる」とある。「音楽を愛好する心情を育てる」とは、生涯を通して音楽を愛好し、生活の中に音楽を生かしたり音楽文化に親しんだりする態度を、音楽の学習活動を通して育むということである。

これらを育むためには、主体的に音や音楽にかかわり、自分なりの表現意図を持ったり価値判断したりする学習活動を積み重ねていくことが必要である。

本題材を通して「追究する力」を育む主体的・対話的で深い学びを充実させるための取組について、三つの視点から述べることとする。

(1) 視点1【学びを引き出す】

児童の「学びを引き出す」ために、課題設定の工

夫を行った。2でも述べたように、学校生活において改善したい問題を共有し、音楽によってメッセージを伝えるという学習課題を設定し、音楽づくりに取り組む。このような課題設定により、児童に「目的意識・相手意識」を持たせ、意欲的に課題に取り組むことができるようにした。また、毎時間の学習活動を生み出す「問い」の工夫により学びを引き出していった。

学校生活において改善したい問題については学級活動の時間として位置付け、音楽の力でできることについて考えることで、音楽づくりへの意欲につながった。また、鑑賞の時間を組み込み、音楽のもたらす効果について学んだことを音楽づくりに生かすことができるようにした。

このように課題設定や題材構成の工夫、課題解決型の学習過程（課題設定→個・全体での追究・表現→振り返り）、「問い」の工夫により、児童の「学びを引き出す」こととした。

(2) 視点2【学びを振り返る】

児童がまず自分の思いや考えを持つ時間を大切に、自分と他者との考えの違いや、意見の交流から考えが変容したことがわかるような学習シートを工夫した。

さらに、協働して考えたものが音や音楽を通してどのような表現になるのかが実感できるように、常に音や音楽の再現提示を行った。客観的に聴いたり、見たりする場を設定し、児童が学びを振り返られるようにした。

授業の終末には、本時の内容に関する振り返りと、課題についての振り返りを学習シートに記入し、次時の授業、新たに生まれた課題解決につなげられるようにした。

(3) 視点3【学びを支える】

学習内容や学習活動の方法が把握できるように、ポイントをスライドにまとめて提示したり、前時の振り返りからスタートし、児童が本時の課題を明確に把握できるようにしたりした。

また、音楽編集ソフトを用いてTVに提示したり、録音機器を活用して音の再現提示を行うなど、可視化することで客観的に振り返ることができるようにした。このようにして、授業場面やねらいに応じた効果的なICTの活用を図り、学びの支えとした。

4 研究の実際

検証 小学校第6学年

題材名「音楽でメッセージを伝えよう」

～そうじの終わりを伝える音楽をつくらう～

(1) 本題材について

① 本題材のねらいについて

本題材は、音楽科教育に求められる知覚・感受した音楽のよさや美しさを自らの表現へ生かすこと、及び学習活動全体に求められている言語活動・協働の学びを通して、音楽科学習の二つの領域（表現・鑑賞）を相互に往還できる学習活動を展開できるものである。生活の中に音や音楽は欠かせないものであり、学校生活においてもそれらが合図となって子どもたちが行動する場面が多々ある。しかし、前述のように、音楽の授業ではなかなか学校生活とリンクできず、子ども達にとっての生活と音楽とのかかわりが薄いと思われる。さらに、本題材を6年生で実践することで児童会活動等の面からもアプローチできると考える。

以上のことから、本題材において音楽づくりの学習活動を行うことは、自ら課題を発見し追究していくという資質・能力の獲得にもつながり、本校の学校教育目標の「よく考え意欲的に学ぶ子ども」の実現につながるものであると捉えた。

② 児童の実態（男子18人、女子22人、計40人）

対象児童の事前調査によると、音楽の学習への興味関心は比較的高い。また、委員会活動や学年における活動において、積極的に働いたり最高学年として学校を引っ張ったりする意欲と行動力が高い児童が多い。音楽科の学習においては、曲を鑑賞した際に聴き取ったり感じ取ったりしたことについて、「音楽のどこからそのように感じたのか」と根拠を示して自分の意見を述べるができる児童は8割程度である。「なぜそう思ったのか」を音楽の要素や仕組みと関連して記述できる児童は6割程度である。

また、質問紙調査の「音楽の授業を通して知ったこと、できるようになったことを、他の授業やふだんの生活の中で活用できないか考えるようにしている」の項目について「まあまあそう思う」は4割程度で、「そう思う」と答えた児童はいなかった。

(2) 検証授業

① 本時の目標

「あと2分でそうじの時間が終わります。」というメッセージが伝わるように、「ソーゾワレ」の旋律をつくること（アレンジすること）ができる。

② 検証授業（本時）の展開

「そうじの終わりを伝える音楽」をつくる。

- 1 めあてを確認し、前時の鑑賞で学んだことについて振り返る。 【全体】



【視点1】前時の鑑賞で着目した音楽の要素からどのようなことを感じ取ったかを振り返り、音楽づくりへのヒントとなるようにする。

- 2 本時の問いについて考える。

どうすればあと2分が伝わるのだろう。

- (1) 自分の考えを持つ。 【個人】



- (2) 班で伝え合い、音楽の設計図にまとめる。 【班】



自分の書いた設計図について考えを出し合っている場面。

A：大きくからだんだん小さくなって、「片づけだ」ってなって…。
B：それ2分前じゃないんじゃない。

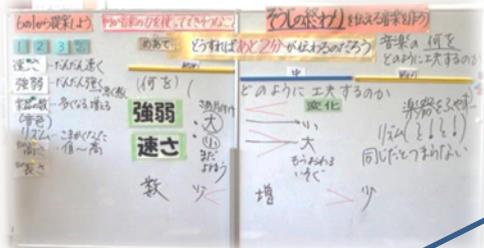
3 実際に演奏し、変化させた要素の効果や働きについて考える。 【グループ】

難しいな。だんだん速く弾くのは



シンバルを入れると終わったという感じがする。

4 学習したことをまとめ、振り返る。
(1) 問いに対する分かったこと、気付いたことを伝え合う。 【全体】



音が小さいのはまだ余裕がある感じ、音が大きくなるともうそろそろ終わる、急ぐという感じがあるから…

【視点2】

振り返りの視点

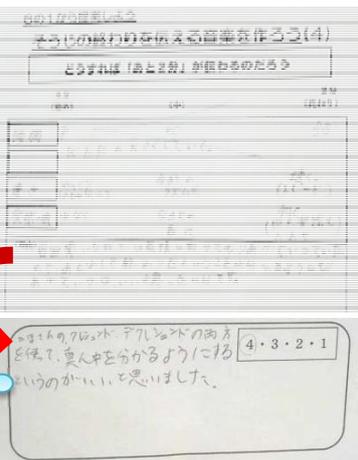
「そうじの終わりを伝える音楽をつくらう」について考えることができたか。



【視点2】

自らの考えが変容したことが分かるような学習シートの工夫

「<>を使って真ん中を分かるようにするのはいいと思った。」



(3) 検証結果と考察

① 対話の場面における児童の発話記録の分析

「どうすればあと2分が伝わるのか。」について班で伝え合っている場面を記録し、分析を行った。

以下は、その発話記録である。

表2 班における対話の発話記録 (一部抜粋)

児童	発話記録
児童A	最初を強くして、だんだん弱くするのがいいと思う。
児童B	最初から強かったらもう終わったなという感じになるんじゃない？
児童A	大きくして行って、だんだん小さくなって、『片づけだ』となって…。
児童B	でも、それ2分前じゃなくない？1分前とかじゃない？
児童C	じゃあ、1分間は大きくして、最後残り1分間は小さくするといいんじゃない。
児童A	あ…。
児童B	

班での活動の後、全体の場でも伝え合い、以下の様な考えが出された。

表3 全体の場で出された児童の意見 (一部抜粋)

要素等	考え
強弱	<ul style="list-style-type: none"> ●そうじが終わりやすいから、だんだん小さくしていった方がいい。 ●大きくから小さくすると終わりが分からない。大きくなると終わりが近づく感じがする。 ●最初の音が小さいのはまだ余裕がある感じで、音が大きくなると、もうそろそろ終わる、急ぐという感じがあるから、小さくから大きくの方がいいと思う。
音の重なり・音色	●いろんな楽器を入れていくことでそうじの終わりが伝わる。
楽器の数	●間の時間が分かった方がいいから、はじめ少なくしてだんだん増やして、また少なくするといいい。

表2・表3の児童の姿から、音楽を形づくっている要素(強弱等)を用いて、実際のそうじの場面を想像しながら、どのように変化させれば「終わり」が伝わるかについて考え、また他者と対話しながら課題解決に向かっていることが分かる。

これは、身近な生活の場面からの課題設定により、目的意識・相手意識を明確に持つことができたこと、また、「どうすればあと2分が伝わるのだろう」という課題に迫る問いにより、児童が音楽の何(要素)をどのように(変化)すればよいかを具体的な場面を想像しながら考えることができたからだと考える。

② 本時の授業後の振り返りの分析

毎時間、授業の終末に「そうじの終わりを伝える音楽をつくろう」について考えることができたかを振り返っている。その記述内容についてテキストマイニングによる分析を行った。名詞群や動詞群に出現頻度が高かった内容から考察すると、「意見」「音楽」「強弱」「速さ」など、課題解決に向けて音楽の力でどのようにしたらよいかについて考えたことが分かる内容が多く出現していることや、「思う」「終わる」「考える」「伝える」など、他者との対話により、様々な意見を聞き、よりメッセージが伝わる音楽にしようとしていることが分かる言葉の出現が高いことが分かった（表4参照）。

表4 本時の学習についての振り返りの記述分析による出現数

名詞	スコア	出現頻度	動詞	スコア	出現頻度	形容詞	スコア	出現頻度
意見	1.50	10	思う	0.11	14	いい	0.09	12
音楽	0.44	8	しく	0.24	12	良い	0.08	7
強弱	5.60	8	終わる	0.24	10	やすい	0.10	4
速さ	3.50	5	考える	0.26	10	難しい	0.15	4
楽器	1.15	5	伝える	1.26	9	よい	0.02	3
クレシェンド	2.80	4	つける	0.51	9	速い	0.11	2
考え	0.47	4	伝わる	2.23	9	大きい	0.01	1
変化	0.55	4	分かる	0.33	8	くわしい	1.00	1
工夫	1.54	3	できる	0.05	7	うまい	0.01	1
ほさ	2.00	2	聞く	0.09	6	強い	0.01	1
なかった	0.01	2	変える	0.15	4	面白い	0.01	1
最後	0.03	2	づくる	0.14	3	---	---	---
どンドン	0.06	2	増やす	0.12	3	---	---	---
いろいろ	0.23	2	使う	0.01	2	---	---	---
真ん中	0.05	1	生かす	0.29	2	---	---	---
場面	0.07	1	深める	0.83	2	---	---	---
速い	0.02	1	づくれる	0.83	2	---	---	---
おきない	0.70	1	もつ	0.01	1	---	---	---
完成	0.02	1	でる	0.00	1	---	---	---
表現	0.02	1	取りまとめる	0.70	1	---	---	---
友だち	0.07	1	成り立つ	0.26	1	---	---	---
分間	0.06	1	がんばる	0.01	1	---	---	---
書くこと	0.58	1	言う	0.00	1	---	---	---

また、図1は「そうじの終わりを伝える音楽をつくろう」について考えることができたか、児童による評価を示したものである。

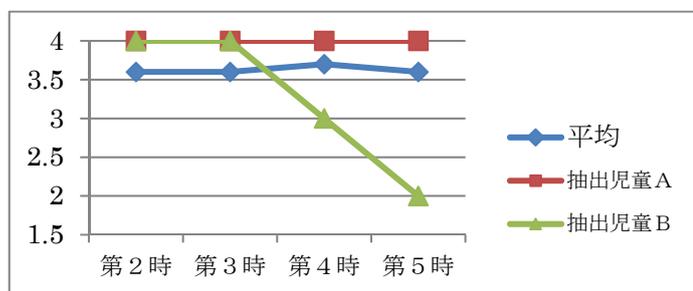


図1 課題に迫ることができたかの児童の評価

(4件法 N=40)

題材を貫く課題である「そうじの終わりを伝える音楽をつくろう」について考えることができたかに関する児童の評価は、第2時から第5時まで平均して高い数値を示している。これは、目的意識・相手

意識のある課題設定の工夫により、児童の追究する意欲が持続していたからだと考える。

さらに、表5は、抽出児童の第1時から第5時までの振り返りの記述を追ったものである。

表5 第2時から第5時までの振り返りの自由記述 (抽出児童)

	抽出児童A ※下線部は執筆者による
第1時	これから歌をつくっていききたい。
第2時	音が分からなくなって途中で音が外れたからこれから頑張っていきたい。
第3時	「山の魔王の宮殿にて」を聴いて1, 2, 3ではなく, <u>3, 2, 1</u> と戻るようにした方がいいと思った。
第4時	Kさんの意見が良かったと思った。ぼくたちもKさんの意見と同じようにしたけど <u>うまくいかなかったのもっと工夫していき</u> きたい。
第5時	ちゃんと自分の意見を言えて良かった。後、 <u>この音楽を工夫していき</u> きたい。
	抽出児童B ※下線部は執筆者による
第1時	そうじに関する歌を見つけられなかった。
第2時	いろいろなことをもっと提案して <u>みんなに伝えるようにしたい</u> 。
第3時	「山の魔王の宮殿にて」を聴いて、私たちがつくったのよりもいいと思った。私たちがつくった歌は音程がずれているから。
第4時	来週はもっといい考えをして音楽をつくっていききたい。
第5時	いろいろな意見が出て、はじめ3番が良かったが、 <u>Nさんの意見を聞いて1番が</u> いいと思ったので、次の授業の時に考えたい。

表5の記述からは、児童A、B共に、課題に迫るためにどのように取り組んでいくかについて述べられており、次への課題意識が生まれていることがうかがえる。継続する課題意識により、「追究する力」が身に付いてきていると考える。

一方で、図1に示す抽出児童の評価(4件法)は、児童Aは第2時から第4時まで全て「4」、児童Bは「4→4→3→2」と選択しており、そこには「課題について考えることができたか」について、児童Aと児童Bの捉え方には違いがあったと思われる。

児童Bは、グループや全体における他者との対話により、自分の考えをより客観的に捉えられるようになり、このような評価になったのではないかと考

える。時数を追うごとにより課題に迫る具体的で多様な考えが出され、それらの意見を聞いて、再度自分の考えについて客観的に振り返ることができている姿の現れではないかと考える。

5 研究のまとめ

音楽科における研究の主張点は、身近な学校生活における問題を音楽の力を使って解決するという課題設定と、課題設定→個・全体での追究・表現→振り返りという学習過程により課題解決型の授業構成を行ったところにある。音楽と生活とのかかわりに関心をもち、音楽経験を生活に生かし、生活を明るく潤いのあるものにしていく態度と、その過程でよりよい音楽を「追究する力」が育まれるかどうかを検証するものであった。検証授業はもちろんのこと、この題材を通して発話記録や振り返りの自由記述等を分析したものは、そのすべてに児童が主体的に課題に向けて解決しようとする意識の高まり、考えの深まりが見られ、よりよい音楽を「追究する」姿として現れたことは大きな成果であると言える。

また、児童が自らの学びを客観的に振り返り、他者との対話を通して学び合う学習の中で、「どのような力が身に付いたか」について自由記述で記したのが表6である。

表6 本題材を通して児童自身が「身に付いたとする力」の自由記述（一部抜粋）

児童	身に付いたとする力
A	みんなに伝えられるように考える力
B	自分たちで考える力
C	目的を持って最後まであきらめずやり遂げる力
D	相手の立場に立ち、分かりやすく説明する力
E	みんなのために何かをする力
F	今までの学習を生活にいかし、行動をよりよくする力
G	音楽で生活をよりよくする力
H	みんなと一緒に考えて解決する力

表6の自由記述例や表7のテキストマイニングによる分析から、児童が自らに身に付いたとする力には、「相手」意識や「目的」意識を持ち、課題に向けて「音楽」を使って「考える力」、「相手」に「伝える」力、「やり遂げる」力だと捉えている児童が多い

ことが分かった。

また、検証授業前と検証授業後に実施した音楽科の授業における意識調査の結果を比較し、検証前後で意識の変容を分析した。

表7 テキストマイニングによる「自らに身に付いた力」の自由記述分析

名詞			動詞		
	スコア	出現頻度		スコア	出現頻度
考える力	5.60	8	伝える	0.26	4
音楽	0.25	6	やり遂げる	2.00	2
相手	0.10	4	使う	0.01	2
行動	0.13	3	もらう	0.00	1
生活	0.04	2	とる	0.00	1
目的	0.10	2	立つ	0.01	1
協力	0.08	2	つける	0.01	1
最後	0.03	2	伝わる	0.03	1
気持ち	0.01	1	分かる	0.01	1
立場	0.05	1	結び付ける	0.70	1
説明	0.01	1	取り入れる	0.12	1
目的意識	0.70	1	がんばる	0.01	1

検証前後の調査結果を比較した図2によると、すべての項目で検証授業後の意識が高まっていることが分かった。特に顕著な伸びを示しているのが、「学んだことを他の授業やふだんの生活で活用できないか考えるようにしている」や「音楽の要素を、考えを持つために役立てている」の項目であった。「音楽の授業の中で、自分たちで課題を考えたり、解決したりする方法を工夫して取り組むことができる」や「自分は、新しい音楽の課題に出会ったときに、それを解いたり、解決したりしてみたいと思う」についても意識の高まりが見られ、主体的な学びへとつながっていると見える。

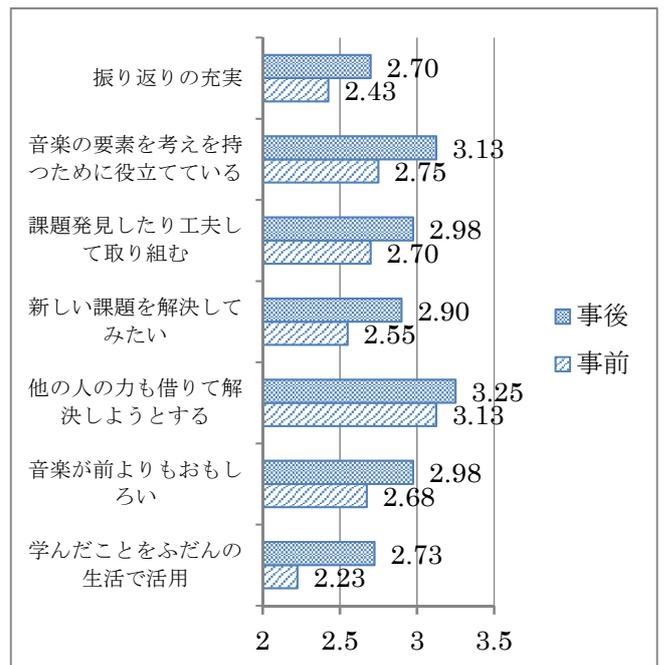


図2 学習前後の意識調査 (4件法 N=40)

音楽の授業を通して自ら課題を発見し追究していく力を獲得していくことは、「これからの社会に求められる資質・能力」を育成することにもつながり、学校目標の「よく考え意欲的に学ぶ子ども」の実現にもつながったと捉える。

今後も、児童生徒が楽しく音楽にかかわり、音楽を学習する喜びを得るようにすることを一層重視するとともに、学校で学んだ音楽を家庭や地域でより楽しめるようにするなど、音楽を生活の中に生かしていく態度を育む授業、生活や社会における音や音楽の働きについての関心や理解を深めることのできる授業を創造していきたい。

《引用・参考文献》

- ・文部科学省平成 20 年 8 月
『小学校学習指導要領解説音楽編』
- ・中央教育審議会教育課程部会平成 28 年 8 月『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』
- ・中央教育審議会教育課程部会平成 28 年 8 月『芸術ワーキンググループにおける取りまとめについて』
- ・国立教育政策研究所 平成 23 年 11 月
『評価基準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（小学校 音楽）』